

2.

最新の研究成果による噴火実績等の見直し

2. 富士山における噴火等の履歴の概要

1

過去5,600年間で
約180回の噴火が確認されている

2

そのうち96%が小規模噴火あるいは
中規模噴火である

3

溶岩流が発生した噴火は約6割
火砕流が発生した噴火は1割以下である

4

1707年の宝永噴火を最後に、その後
約300年間、噴火は確認されていない

5

過去2万年間に3回の山体崩壊が起き^{※2}
大規模な岩屑なだれを発生させている

※1 数値は検討委員会調べ。

※2 山体崩壊の発生の要因は複数あり、噴火によるものか否かは特定できていない。

2. 対象とすべき富士山の噴火年代区分

point

- 富士火山地質図（第2版）に基づき年代区分を再設定した。
- 今回の改定では、活火山の定義である過去1万年の間で、特に噴火活動が活発な須走-b期（約5,600年前）以降を対象とすべき富士山の噴火年代区分とした※1。

今回の改定による噴火年代区分一覧

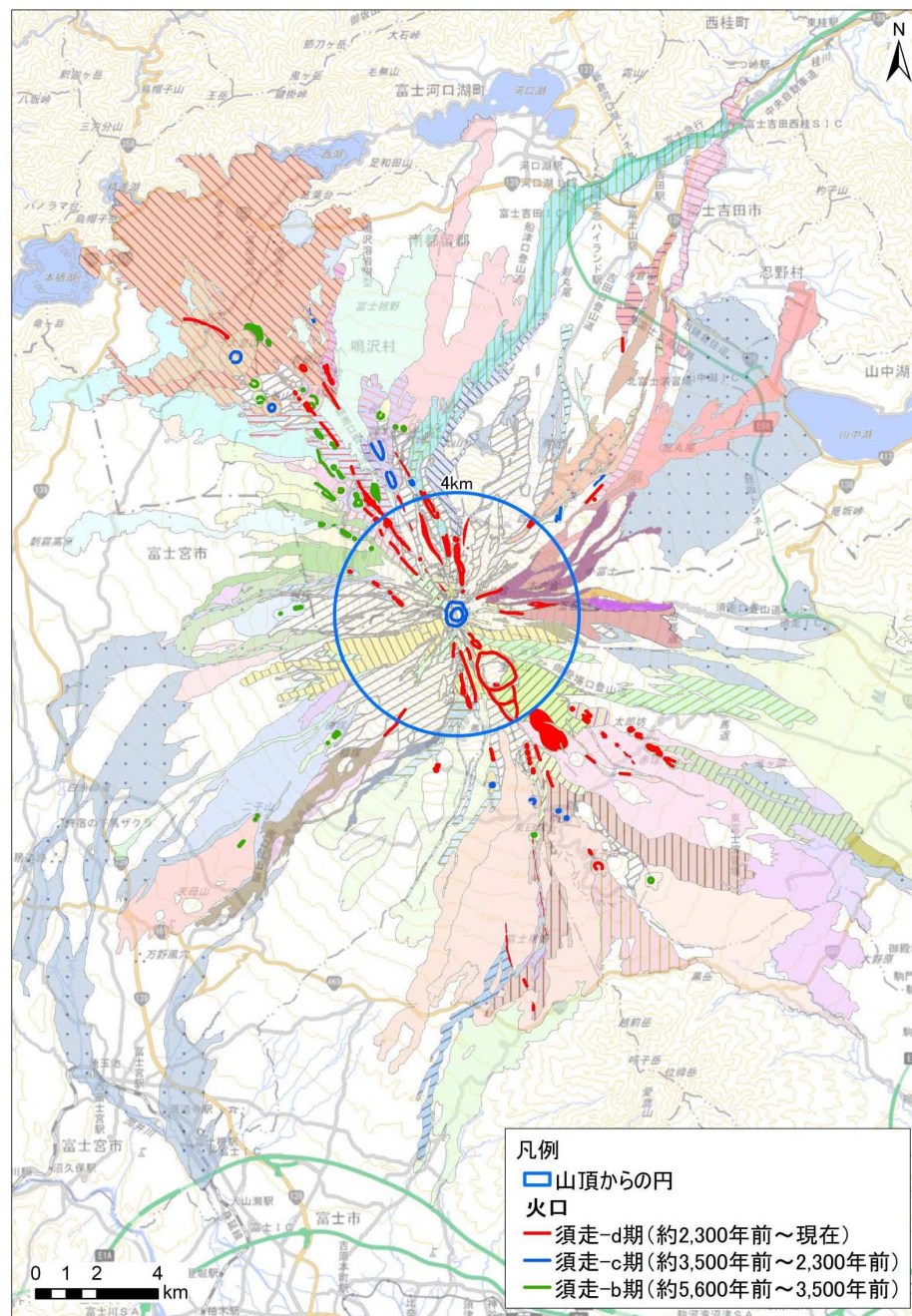
年代区分		時期	主な噴火口の位置	噴火の傾向
星山期		約10万年前 ～約17,000年前	—	爆発的噴火 複数回の山体崩壊 ※2
富士宮期		約17,000年前 ～約8,000年前	—	溶岩の大量流出
須走期	須走-a期	約8,000年前 ～約5,600年前	(静穏期)	小規模な火砕物の噴出 (富士黒土層※3の主要部分形成)
	須走-b期	約5,600年前 ～約3,500年前	山頂と山腹	溶岩の流出、火砕流の発生 (現在の円錐形の火山体の形成)
	須走-c期	約3,500年前 ～約2,300年前	山頂と山腹	爆発的噴火、火砕流の発生 山体崩壊※2
	須走-d期	約2,300年前 ～現在	山腹	溶岩の流出 爆発的噴火(宝永噴火)

※1 噴火年代区分の須走期等の名称は模式地の地名による。表中の赤枠は、対象とすべき富士山の噴火年代区分を示す。当該年代区分を設定する理由は、富士山の火山防災対策を検討するにあたっては、富士山がどのような噴火を繰り返してきた火山であるかを認識しておく必要があり、噴火史のうち、現在の傾向と類似する、もしくは将来的に起こる可能性のある噴火形態を含む「期」ないし「ステージ」を考慮対象として設定する必要があるため。なお、平成16年版では約3,200年前以降の噴火事例を対象としている。

※2 山体崩壊の発生の要因は複数あり、噴火によるものか否かは特定できていない。

※3 火山灰があまり降らなかったことにより、植物が茂りそれが腐ってできる黒土（腐植土）に富む地層。

2. 山頂付近の伏在火口を考慮した想定火口範囲の設定



火口及び噴出物の分布、山頂から半径4kmの円

point

山頂から半径4km以内の全域を想定火口範囲※に追加。

追加した理由

山頂周辺は、降下火砕物が厚く堆積しているため未知の火口が埋まっている可能性がある（伏在火口）。この可能性を考慮し、山頂から半径4 km以内の全域を、中規模噴火及び小規模噴火の「山頂付近の伏在火口を考慮した想定火口範囲」とした。

例えば、中規模噴火の産物で火口が特定されていない鷹丸尾溶岩流も、この半径4 km内から噴出したことが確実である。なお、大規模噴火の火口は全て特定されており、半径4 kmを想定火口範囲には追加しない。

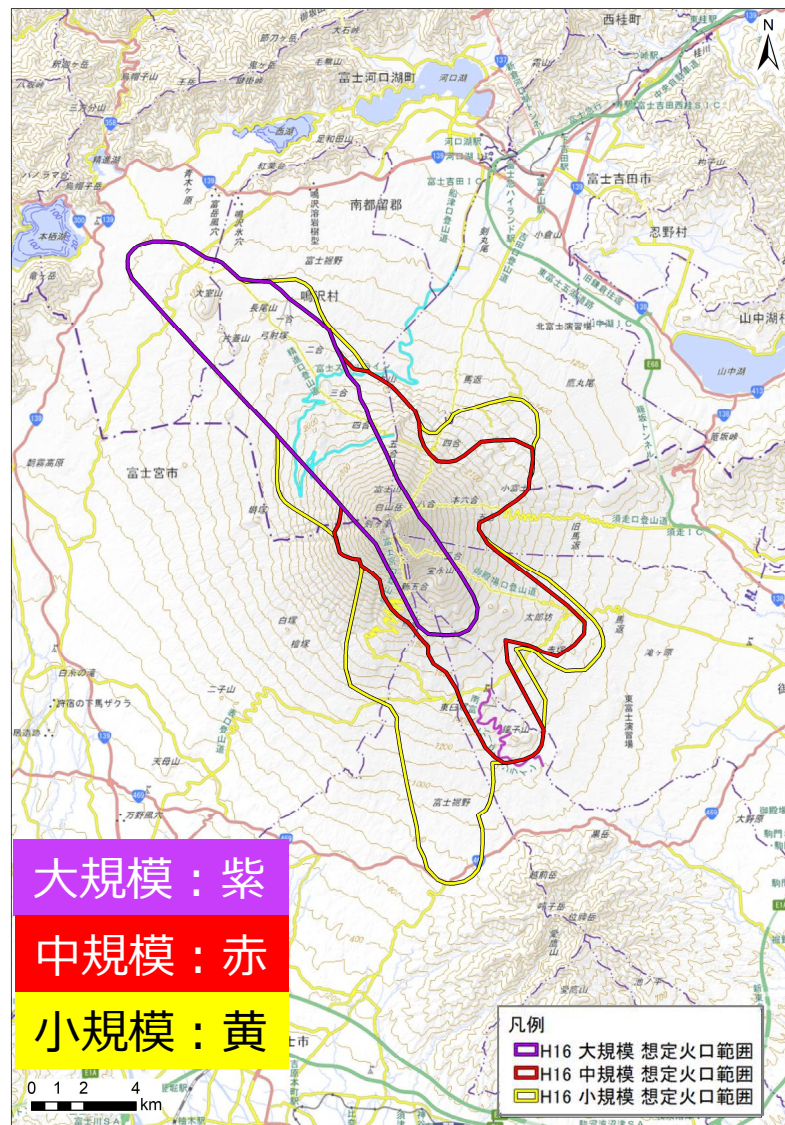
※ 左図のとおり、富士山の火口は広い範囲に分布し、次に起こる噴火でどこに火口が生じるかは分からないため、これまでに噴火した火口（実績火口）とその関係性や地質調査の状況にもとづき、火口が今後生じる可能性が高い範囲を「想定火口範囲」として設定する。

2. 新たに想定した「想定火口範囲」

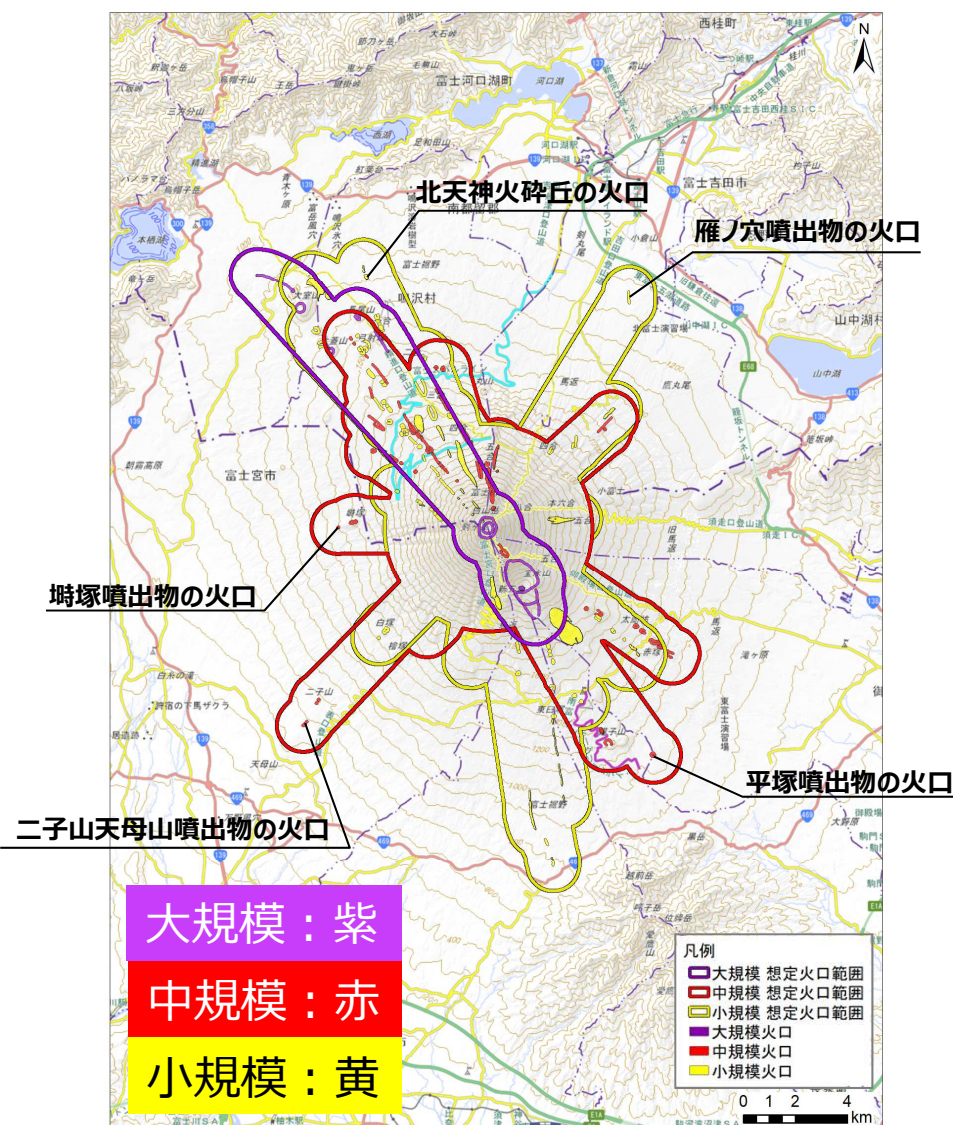
point

平成16年版の想定火口範囲との主な変更点は、新たに追加された中規模噴火及び小規模噴火の火口及び山頂から半径4 km以内の全域を想定火口範囲に追加したことに伴い、想定火口範囲が広がった。

【旧】 想定火口範囲図（平成16年版）



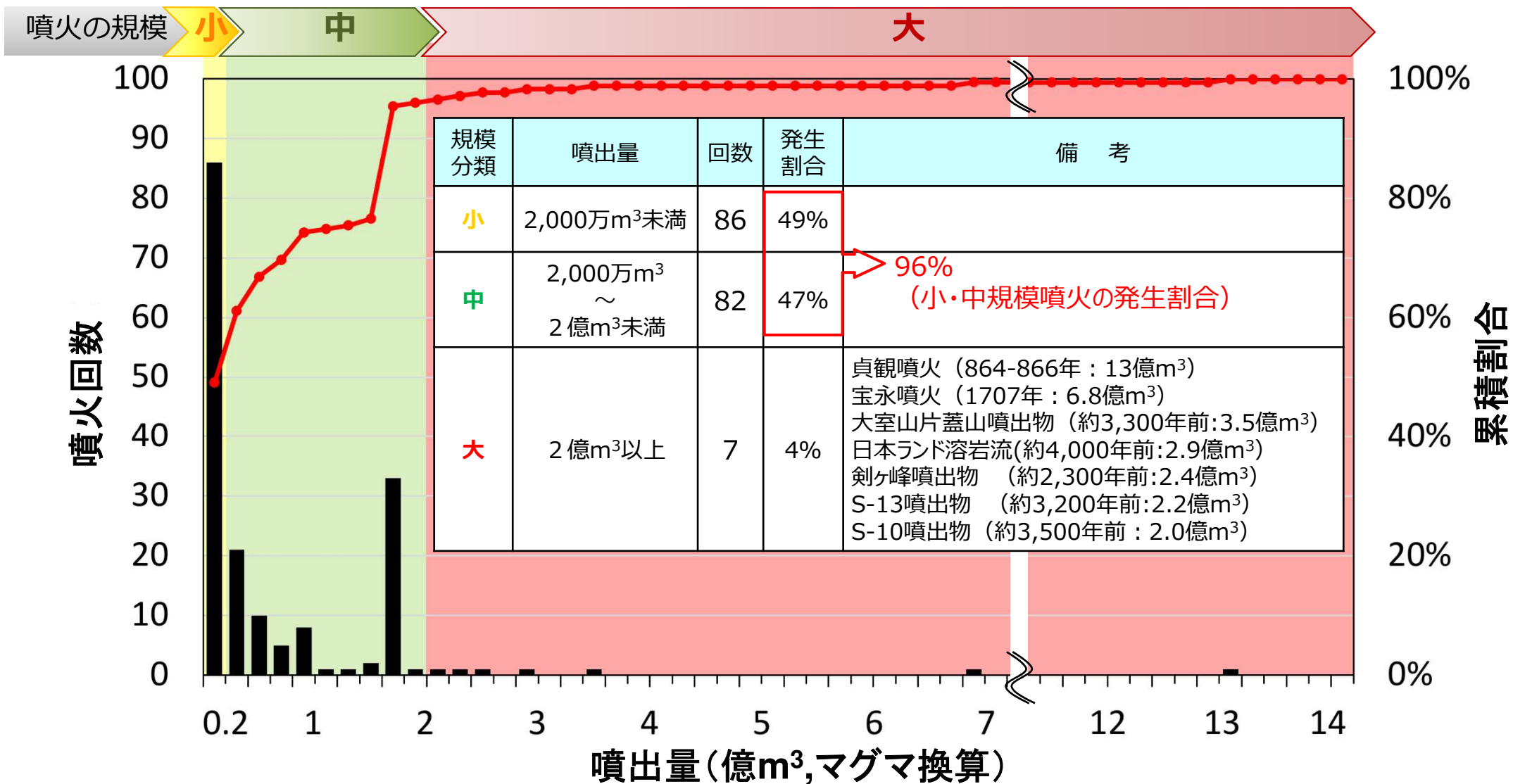
【新】 改定後の想定火口範囲図



2. ハザードマップが対象とする過去5,600年間の噴火の規模と回数

point

過去の噴火では、96%が小規模噴火あるいは中規模噴火であるが、次の噴火が頻度の高い小・中規模になるとは限らず、頻度の低い大規模噴火になる可能性もある。



注) 産業技術総合研究所提供の噴出量及び噴火回数のデータに基づく